

日本村塾教育

私は植物と人々の博物館の読書会として、日本村塾セミナーを提唱しているので、時々ネット検索をして「日本村塾」の内容確認をしていて、『日本村塾教育』（1935）という本があることに気が付いた。著者の大谷英一はクリスチャンで、太平洋戦争が始まる直前の1935年にこの本を書いている。この戦争時代に、クリスチャンである彼がよくぞ書いたものだと驚くような内容で、現在の私の考えにとっても大筋は近いように感じた。

大谷の略歴は次の通りである。九州大学農学部で農業経済学を学び、1931年に文部省嘱託としてドイツとデンマークに留学、帰国後、伊豆半島の久連（現在の沼津市西浦）の国民高等学校の経営にあたり、1937年、インドで開催されたYMCA世界大会に日本代表として出席した。戦争中には、政府当局の圧力があり、それに屈して大政翼賛会に協力した。彼はこのことを悔いて、敗戦後の1946年に校長職を辞して郷里の栃木県に戻った。その後も、地元で農民教育に尽くし、矢板市の第4代市長（1974～88年）になった。大谷の著書『日本村塾教育』は国会図書館で複写してもらい、読了後に、インターネット検索で古本を見つけて、関連した古本『新興村論』（1936）、『平和の國デンマーク』（1948）とともに3冊を購入した。しかし、『日本村塾日記』（1935）はついに見つからなかった。

そもそも、日本村塾教育の実体は昭和初期に静岡県田方郡西浦村久連にあった興農学園、久連国民高等学校のことであった。デンマークのキリスト教主義に基づくフォルケホイスコレ *folkehøjskole* / *folk high school* を模範として、久連に農場を所有していた渡瀬寅次郎の遺言で、遺族の資金提供により、彼の札幌農学校における旧友、内村鑑三や新渡戸稲造らが協力して、1929年に設置された。初代校長は平林広人で、青年を対象に共同生活の中で、農民の実生活に即した教科・実習が行われた。

1933年に財団法人興農学園となり、久連国民高等学校と改称し、大谷英一が二代目校長になった。豊かな農業国デンマークの理想を求めて、全国から総計約200名の生徒が集まった。柑橘栽培の研究、講習会開催などをして、地域にも貢献していた。ところが、第2次世界大戦が激しくなるにつれて、国粋化の圧力を受けて、1942年には農道塾と改称し、1943年には実際の教育活動は停止した。敗戦後、大谷は興農学園を再興することなく、故郷の栃木に戻った。その後を受け継いだのが古里和夫で、1955年からしばらく柑橘の研究や海外の樹木、コルクガシやエリカなどの保存・公開を行っていた。

静岡県立有用植物園

大学に入学したばかりの1968年の夏、学生サークル児童文学研究会の合宿が西伊豆の松崎の寺で行われた。私は高校生の際にたくさん小説を読んで、小説に飽きていたので、大学生になってからは童話に興味を移していた。合宿前日に、2年先輩の細川さんが土肥の網元の家の出だったので、土肥の海岸で男子学生4人だけでキャンプをした。研究会の合宿終了後、私は黒田君と伊豆半島を巡る野宿旅行をした。ある神社の社殿の軒下で寝ていたら、深夜、白猫が走り去ったので、民俗的恐怖を覚えたことを記憶している。翌朝は、東海バスの始発で、県立有用植物園に古里和夫先生を訪

ねた。早朝、開園前にもかかわらず、園長自ら快く、礼儀知らずの若者を案内して下さった。

当時、私は大学裏の里山にアケビを見つけて、その実のおいしさと形の奇妙さに感動して、バナナのように食べられる種無しアケビを作ってみたくなった。そこで、まず練習として種無しスイカを作る事を試みた。2倍体のスイカの苗にコルヒチンをつけて4倍体にし、元の2倍体と掛け合わせて3倍体の種無しスイカにするのだ。大学キャンパスのはずれの山林地に焼畑を造り、スイカを育てた。もちろん、シダを研究していた理学部の近田先生の許可を得て行った。このことを古里先生にお話したら、スイカの花粉を所望されたので、花をお送りしたことがあった。

夏休みに、同級生の藤村君と久保さんは三島市にある国立遺伝学研究所でアルバイトをしていて、同じく学園闘争に飽きていた私に同研究所の阪本寧男先生を紹介してくれた。彼はエチピアの海外学術調査から戻られたばかりであったので、2度ほど大学で講演をお願いした。貧乏学生の私たちには何のお礼をすることもできず、考えすら及ばなかったところ、和田先生がフォローして下さった。これがご縁で、私は卒業研究を遺伝学研究所研修生として、阪本先生に見ていただくことになった。

また、学生当時は知りもしなかったのだが、古里先生との知遇によって、私は国立遺伝学研究所の阪本師の弟子になることができたようだ。阪本師の最近の手紙(2019)に、古里先生の推薦がなければ、私を受け入れる気はなかったと書いてあった。阪本師は木原均〔注：パンコムギの起源を明かした世界的に高名な遺伝学者〕の最期の助手であったのだが、当人が自称するように相当の天邪鬼だから、弟子などはもたないと考えていたのだろう。失礼ながら、世間とは相当ズレていて、旧制中学校生で経験した戦中および敗戦直後の嫌悪する体験によって世俗の名利にはそれなりの反感を持っていたのだと邪推している。そのお陰で、人見知り強く、世間に疎くいたかった私の性癖もさらに助長されたようだ。

この戦争体験は彼の人生に大きな心の傷を与えたようで、ごく最近の手紙にも食料の買い出しで経験したいやな思い出を繰り返し追加記述してあった。京都近郊の農家は、京都人が食料を求めて持ち込む高価な物品としか、食料を交換してくれなかったそうだ。したがって、地元民は配給が不足するときは、遠くまで食料を買い出しに行かなければならず、うまく入手できても、警察に取り締まられて没収されてしまった。このことは東京近郊でも同じようであったと、いく人かの作家が疎開での出来事を恨みに思って回想している。農家からすれば、日頃の蔑視と農産物を安く買いたたかれたことへの怨念を、この際とばかり、果たしたのであろう。一概に、都会人が農家を責めるのは、農村の窮状への無知ゆえとはいえ、羞恥心がなかったようにも思われる。

私の祖父の実家は稲作農家で、濃尾平野の木曾川のほとり、輪中の中にあつた。一大稲作地帯だから、ここから親戚として戦争中も食料は分けてもらえていたようだ。しかし、それでも敗戦後には、もらってきたイネ米も警察に闇米として没収されたこともあったと、祖母から聞いた。この祖父は徴兵されてシベリアに出兵し陸軍上等兵で、父も戦争末期に徴兵されて、呉の海軍新兵で敗戦を迎えた。名古屋市は焼夷弾で焼き尽くされ、その恐怖は祖母や母から聞かされていた。現在の名古屋市の道路が広いのは、爆撃で街が破壊されたので、新たな都市計画の線引きが容易だったからだ。

さて、私は7月いっぱい自動車運転を止めることにしたので、廃車にする前に伊豆半島を巡ることにした。2019年6月に吉奈温泉に2泊して、南伊豆を走った。事前に旅館の人に、観光地図に

なかった県立有用植物園について聞いたのだが、不明確で要領を得なかった。その際に、インターネット検索をしたら、研究報告の記事はあるものの、植物園の存在は不明であった。帰宅後、さらに詳細に検索したところ、1950年に南伊豆町石廊崎に開設された有用植物園はたびたび改称されて、1977年に農業試験場伊豆分場、翌1978年に伊豆振興センター南伊豆農場、1987年に農業試験場南伊豆分場として南伊豆町上賀茂へ移転、その後、ここは南伊豆亜熱帯公園として一般公開されている。

ここに記した人々の個人史が不思議なことに私の興味と、彼らの活動とその場所とを結びつけたので、7月にもう一度吉奈温泉に泊まって、沼津市西浦の興農学園農場跡を訪ねた（写真）。



写真： 興農学園農場跡の石碑

人々をつないだ心と場

古里先生の経歴について書かれた文献は国会図書館で探した。古里先生は興農学園農場を継いで、

その後、上記の静岡県立有用植物園長、浜松市のフラワーセンター長を順次歴任されていた。私が出あったのはこの頃で、1968～1969年のことであった。

古里先生は1912年に岐阜県で生まれ、千葉高等園芸学校を卒業してから岡山県で女学校教員、1940年に京都帝国大学農学部（木原均研究室）を卒業、南洋興発株式会社で研究開発・農場経営、敗戦後フィリピンから帰国、1946年に木原生物学研究所研究員、同年に興農学園長になり、1954年に国立遺伝学研究所研究員、1960年に柑橘類の細胞遺伝学的研究で農学博士、1961年に静岡県立有用植物園長、1971年に浜松市フラワーパーク公社公園長、1993年に永眠された（岩井 2000）。この間に、ハワイ、北アメリカ、ポルトガル、カナリー島、マディラ島、南アフリカ、南アジア、オーストラリア、ニュージーランド、中央・南アメリカ、中国などで、植物調査を行ってきた。

私はほんの2、3回お目にかかっただけだけれども、こうして略歴を見ると、木原学派の流れで同じアカデミック・ファミリーであり、つくづく冒険人生の出会いの不思議さを知り、私の研究人生の起承転結を感慨深く考え、また多くの方々に支えられて自由な生き方ができたことに、改めて感謝の念を強くした。

デンマーク国の話

興農学園の創業を求めた渡瀬寅次郎は札幌農学校でクラーク博士の直接の薫陶を受けてクリスチャンになり、その後、種苗会社の経営で成功した。彼は晩年、キリスト教の教えを基礎とする農学校を創立したいと願い、遺言で内村鑑三らにこのことを託した。内村が札幌農学校での一年後輩であったからである。渡瀬がデンマークの農学校に思い至ったのは、デンマーク研究者の平林広人のラジオ放送「丁抹の文化について」を病床で聞いて共感したからであった。一方、平林はデンマークの国民高等学校を日本に創りたいと考えていた。平林が銀座教会で内村に会った際にその想いを聞き、内村は賛成して、彼を渡瀬に紹介した。

日本村塾教育の思想は内村鑑三の著書『デンマーク国の話』（1913）の影響を強く意識していた。さらに、その大元にはグルントヴィ（N. S. F. Grundtvig）のキリスト教理解があり、農民が高い学問を身に付けなければ、民主主義は衆愚政治になると考えて、彼が学んだケンブリッジのカレッジをモデルとした「生のための学校」を求めたのだと言う。生きた言葉で語り合い、それぞれの生を深めていくことが目的であれば、資格や試験、単位などは不要だとグルントヴィは考えた。デンマークの国民高等学校は1844年に最初の試みが始まった。内村は、平林からデンマークのことを多く学び、平林にこの世でなすべき最後の仕事である興農学園を託して、1930年に他界した。

さらに、内村の晩年の弟子であった鈴木弼美は山形県小国村に移住して、1934年に基督教独立学校（現在の基督教独立学園高等学校）を創立した。鈴木は、敗戦のどん底にあったデンマークを救ったのは国民高等学校だと考えた。教養が考える人間を作り、この考える人間が農村を因襲と貧困から解放すべき使命を持つと信じた。これらの他に日本の三愛精神の影響下にある学校は、キリスト教愛真高等学校、望星学塾（東海大学）、酪農学園大学、愛農学園農業高等学校、瀬棚フォルケホイスコーレ、小国フォルケホイスコーレなどがある（小山 2000）。

イギリスのケンブリッジ大学のカレッジをモデルとした「生のための学校」を求め、生きた言葉で語り合い、それぞれの生を深めていくことを目的とし、資格や試験、単位などは不要というグルントヴィの考えは、私の日本村塾 Nihonmura College for Environmental Studies の基本理念とま

まったく同調・共鳴する。私は、日本ではもうさっさと受験教育をやめて、イリイチが言ったように、学校化社会を脱しなければ、幸せに生きるための学びはないと考えている。そこで、自然文化誌研究会とともに行った40年以上の環境学習実践にもとづいた考察して、環境学習原論を記述した。これは単なる環境教育の原理の到達点ではなく、現代の人々の生涯学習の統合原理として提案したものである。

しかしながら、日本村塾の3ゼミ（民族植物学、扶桑園、自給農耕）への参加者はほとんどいない。日本では学校化社会は極まって固定してしまっているため、資格が得られる学校でなければ、教育や学習の営為は認知されない。このために、任意自律、自主独立した学びの場はほとんど成立しない。あるいは残念ながら、これは私の不徳の致すところなのかもしれない。ただし、自然文化誌研究会の冒険学校はほぼ常設化して、山梨県小菅村で継承されているので、少数の子供たちに対しては役立ってきたのだと知足することになっている。

農本主義の負の結末

内村鑑三は1927年に茨城県友部にある日本高等国民学校（現在、日本農業実践学園）を訪問し、加藤完治校長に歓待されている。加藤はデンマークのフォルケホイスコールも訪問していた。彼は、学生時代は熱心なクリスチャンであったが、古神道に転向して、第二次世界大戦中は「満蒙開拓青少年義勇軍」を組織して、2万人以上の青少年を中国大陆へと送り出した。加藤は内村の訪問時には、内村の志を高く評価していた。しかしながら、当時の農本主義者、加藤完治らは基督教の三愛精神の中身を変質させて、皇国日本の現人神天皇を中心とする国家、ここに帰一すべき村、家を位置づけて、個人が直接神に帰一することを忌避し、国家主義に向かい、朝鮮や中国の植民地化に若い農業青年を送り込んだ（小山2000）。日本の農本思想や農本主義も時代によって、個人によって内実が異なるとはいえ、明治期以降は多分に復古的、国粹主義的になったことも多かったようだ（ウィキペディア、船戸1999など）。

私も、今では世間から見れば農本主義 agricultural fundamentalism と分類されるのであろう。しかし、私は農本主義者といわれる中でも例外的な安藤昌益の思想あるいは武者小路実篤の新しき村に連なりたい。したがって、私はせいぜい愛郷主義 patriotism であっても国家主義 nationalism や国粹主義 ultranationalism ではない。現代的には農本主義というより環境主義 environmentalism といった方がよいのだろう。

西村（1992）はエコロジズム ecologism と表現して、安藤昌益や江渡狄嶺、石川三四郎らの系譜をあげている。船戸（1999）は、西村が加藤完治を批判する中で農本主義を狂気と見なした、と引用している。しかし、私は西村とは親しく共同研究してきた経験から、彼が農本主義を公正に批判しこそすれ、そのものを全否定してはいないことを知っている。私は彼からエコロジストに分類され、大いに叱咤激励されてきたが、他界する直前まで暖かく交際していただいていた。

いつまでも水戸学による皇国史観を悪用してきた山縣有朋軍閥とその系譜にあたる農政官僚柳田国男や政治家安倍晋三らの「神の国日本」に呪縛されてはいけぬ。天皇家を利用する二重権力は誰もが政治責任をとらない国家体制（国体）で、幕末期に構築され始めたものだ。このために、第2次世界大戦における日本の戦争責任は曖昧のまま、ほとんど誰も政治責任をとらず、戦争遂行の説明責任を語らなかった。責任ある政治家の多くはそのまますぐに公職追放から解除されて、

政治権力の中心の座に戻った。ヨーロッパ諸国の憲法にみられるように、憲法は本来、国家権力が市民あるいは国民を過剰支配しないように制御するものだ。日本国憲法（連合軍総司令部定）は大日本帝国憲法（欽定）にとって代わって、ほとんど市民・国民一般の議論もなく、敗戦後の急場しのぎに創られたものなので、条文の言葉少なく、明文化が疎かなためその時々々の国家権力の解釈で運用されるまま、70余年を経過してきた。国家権力の側からの憲法改正ではなく、今しばらく時間をかけて、市民・国民の側から憲法論議を広め、深めて、条項の明文化を進めて、さらに自然権や食料主権を基礎とした環境原則についても加筆修正の論議と提案が必要だ。こうして、エコロジズムが農本主義を超克して、先真文明の時代の役割を果たし、日本でもホモ・サピエンス・サピエンスが幸せに生存を続けられるようにすべきだ。

文献

船戸修一 1999、農本主義の再検討—権藤成卿・加藤完治を中心に、

www.jstage.jst.go.jp/article/kantoh1988/1999/12/1999_12_119/.pdf

林浩二 2000、企画展興農学園—みかん村とデンマーク教育の案内、インターネット検索で出典は記載がない。

岩井弘則 2000、植物文化に貢献した人々①古里和夫氏について—植物にかける情熱の人、日本植物園協会誌 34：119-125。

小山哲司 2000、神を愛し、人を愛し、土を愛す—今に生きるデンマーク国の話、初出；水戸無協会 178号。

www.asahi-net.or.jp/~pv8m_smz/archieve/Gott_Mensch_Erdel.html

西村俊一 1992、日本エコロジズムの系譜—安藤昌益から江渡狄嶺まで、農山漁村文化協会、東京。

大谷英一 1935、日本村塾教育、関谷書店、東京。

大谷英一 1936、新興村論、教文館、東京。

大谷英一 1948、平和の国デンマーク、弘文堂。

内村鑑三 1946（2014版）、後世への最大遺物、デンマーク国の話、岩波書店、東京。

参考文献

寺田治史 不明、デンマークと日本の人間教育（I）—池田・ヘニングセン対談が示唆するもの、太成学院大学紀要。2011年以降に書かれた。NII-Electronic Library Service。